

病害虫の見分け方シリーズ

イネいもち病とイネごま葉枯病の見分け方

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 あし ざわ たけ と
植物防疫研究部門 芦 澤 武 人

はじめに

水稻の主要病害であるイネいもち病（病原菌 *Pyricularia oryzae*）とイネごま葉枯病（同 *Cochliobolus miyabeanus*）は、全国で発生するイネに斑点型の病斑を生じる病害である。いずれの病原菌も空気伝染性で、イネいもち病菌は夜間に、イネごま葉枯病菌は昼間に孢子が飛散し、両病原菌ともに夜間に結露があると、孢子から発芽管を生じて付着器を形成して侵入し葉や穂が感染する。この2病害は同時に発生することもあり、発生量が多いといずれも被害につながるため適切な防除手段を講じる必要がある。本稿では、イネの幼苗期から成熟期までの発生の仕方や病斑の違いに加え、ほかの病害と同時に発生した場合等の症状と見分け方について紹介する。

I 育苗期での見分け方

図-1にイネいもち病、図-2にイネごま葉枯病の苗での初期病徴を示した。イネいもち病はまず苗の第1葉（不完全葉）に灰白色で菱形ないし楕円形の病斑を生じ、その後空気伝染により図-3のように苗の葉いもちを生じる。病斑は菱形のものが多く、中央は灰白色で壊死線が生じて病斑の周りは褐色で最外周が黄色であることが多い。イネごま葉枯病は鞘葉、第1葉、第2葉と徐々に上層部へ褐点の病斑が生じ（図-2）、時に条斑を生じる場合もある。苗の時期の両病気は密集する苗の葉に隠れていてわかりにくいので、苗をかき分けてよく観察して見つける。



図-1 苗いもち（苗中央下部の第1葉（不完全葉）に灰白色の病斑を形成する）



図-2 苗に発生したイネごま葉枯病の病斑（褐点や条斑を形成）